放眼日中

「日本企業のお客になればよい」

福建省で先日、ある民営企業の中国人オーナー夫妻と会った。初対面だったが、2人とも流暢（りゅうちょう）な日本語を話す。日本料理屋へ入ると、彼らは好きな物を注文した。日本食には詳しい。1980年代終わり、いろいろと苦労して日本に渡ったそうだ。だが、日本語学校へ行っただけで学費が尽き、大学を諦めてアモイに戻る。

「あの時、お金があったら日本の大学へ行けた。20年以上たっても心残りだ」と、本当に残念そうにご主人は話す。

彼らはその後、アモイの日本企業で働いた。一生懸命に働くが、日本人駐在員からは日本語ができるためにいいように使われ、現地従業員からは日本サイド（経営側）の人間として扱われて、随分と嫌な思いをしたという。「日本企業に勤めてもいいことはありません。給料は安いし、昇進もないし」

そして中国が経済成長する中、欧米企業に転じ、機会を窺（うかが）い独立。今では奥さんと2人、300人の従業員を抱える会社オーナーだ。

「最初は日本語を生かして日本企業を相手に商売してました。でも彼らは品質にうるさいし、価格を買い叩（たた）くので、付き合い切れなくなって取引を止めました」。その後は中国にある欧米企業に取引先を転換、「反日問題もないし、考え方が合理的な欧米相手の方が商売は楽ですよ」と笑いながら言う。

「日本企業との付き合いは勿論（もちろん）ありますよ、ただしわれわれが機械設備を買うお客さんとして。客として接する日本企業はいいですよ。歓迎してくれるし、こちらの要求を真摯（しんし）に受け止めて、聞いてくれますから。昨年、工場の設備を更新した時にも、日本の機械を入れました。何しろ品質はいいですからね。日本に招待してもらいましたよ。楽しかったな」

彼らの話を聞けば聞くほど、中国に進出している日本企業の旗色は悪くなる。ただ、彼らは決して日本が嫌いなわけではなく、ましてや筆者に文句を言っているのでもない。

「私たちが若い頃に憧れていた日本が今、とても残念な国になっていくようで耐え難い」という本音が漏れてきた。彼らは日本が好きなのに、日本に恵まれなかった。

中国には、日本に好意的な印象を持っている人が少なからずいる。特に70年代や80年代の日本の高度成長・技術革新に強い憧れを持つ世代が存在していた。本当は日本と商売したい人も多いのではないか。それを阻んでいるのは「反日」だけではないはずなのに、日本では「中国での失敗は反日のせい」と片付けられるきらいがある。

現在の彼らにとって、「在中日本企業の悪口なんか言っている暇はない」ようである。

「何しろ中国で民営企業が生き残るのは、並大抵の努力ではありませんから。金融引き締めで銀行は金を貸してくれないし、従業員の賃金は5年で2倍以上にしないといけない。おまけに国有企業の圧迫はものすごい。民営企業オーナーの中には、廃業して海外へ移住する人が増えてますよ」と、苦々しげに話す。

日本企業談義している時とは明らかに目が違っていた。

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。